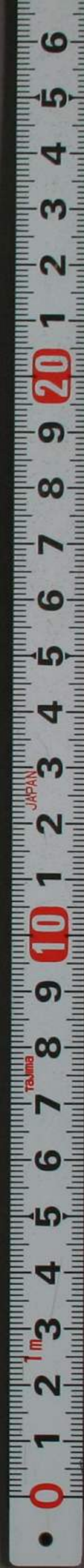




重修真書太閤記

十編  
三



へ18 替  
門 459  
巻 93

消印  
福流

重修真書太閤記十編卷之七

同攻  
會印

秀吉公再度不意と討事

并根來寺衆徒滅亡の事

四種の輪王といふ金銀銅鉄の輪王と云金輪王ハ風  
と望て化み順ハその銀輪ハ使を遣はりて方ニ降  
銅輪王ハ威と震ふて乃服をせしめ鉄輪王ハ戈を  
奮ふてしめ定むとて秀吉公の兵と用ひ  
ては是に似たり又根來の法師ハ放逸邪  
見をして不動明王と祈るとも其本意を  
明王の誓願と對して何とて其利益と乘む

大開已十編卷七

僧徒顯

不動明王の

國家鎮



入つて抑不動明王へ國家鎮護の爲に惡魔降伏の  
 形と顯し、故に誓首聖無動摩訶威怒王極  
 大慈悲心愍念衆生本体盧舍那佛と説き、然る  
 僧徒の身として愍心と專として忍辱の衣と殺伐  
 の鎧と易慈悲の袈裟と殘害の母衣と、財寶と  
 争ふる爲に死傷をうかすも、王命に背き武命を  
 拒く形となり、法師として心へ盜賊は比し秀吉  
 公ののの共と戒沙汰を以て天平泰平あるべし  
 られと思召し、十餘万の大軍と發して、是と責ら  
 せ、いづれ十餘万の兵糧一日千石と費をくつげし  
 十日より万石に至る千石の米へ五十町の田に

生び五十町の田へ百姓百人の耕と処と知し、百  
 人の耕と処と以て軍勢十餘万一日の食に當り、  
 千人の耕と処十日の食にあり、是に加ふる塩  
 曾と薪あり、又運漕の夫食と與ふ、然に大軍と  
 起るとも容易の事あり、根來寺の衆徒已  
 う悪行をうへり、見び民の難義を辨つた、不動  
 明王として秀吉公と誅戮せしめんと、さうりよも  
 明王の体と釘を打つ、僧徒の殘忍無頼た、  
 取つ物あり、然るに寄手陣と開き、三千餘人の荒手  
 と加ふ、是全く明王の加被刀とおのひ明王の祈と  
 止めし、とうや秀吉公の松本岩室両坊主の勢三

千餘人と寺中へ入らざりし深意ありて形も  
寄手あまを止めハこの三千餘人必定四方へ散亂  
して徒黨をあひめ一揆を企へ然らハ根來の外  
み又根來を設くは如し是を根來寺中に入ら  
ハ寺中の兵氣ハ自然と緩み且他も同類を催ふと  
患かると實に遠く謀りふ外と云へ果して寺  
中入てハ三千の荒手を得て今迄さへ十分は防戦  
あまあま又三千の新し手且杉本岩室両坊主の勇あ  
り寄手を追拂ひ法敵を誅し佛餉を安くせん疑  
ひかると思ふより自然と互に氣もたぬ寄手哉  
慢る心を生し杉本岩室の兵ハ積善寺入て手痛く

戦ひし傍武者と知さるけりこそ憂懼けし秀吉公  
ハ其日の薄暮よつとるとまら時分ハいふとぞや  
めとと御下知ありけしハ大和太納言秀長卿の  
一万三千餘人旗の手をおろし楯竹束と突立る  
あハ聲と出して責立る此の共ハうひてあり案  
内ハ知たり秀吉公の内意ハ得たりハ高名  
て日頃の武勇をあらしきと無二無三よせめ寄  
けるよそを先手の柵際近くなりたり先陣何  
れも進んで逆茂木引退あま入んとひしめく見  
て後陣ハあま越しと命とハ塵芥またと義  
と鉄石よひとし責立けれハ勿々は防さ止へ

大問一 續後集  
様をばら寺中より荒手三千餘人よ心をゆるし  
軍の必明日あつめと持場くよ体息し寐るよし処  
へ関の聲引續いて一万三千餘人短兵急責立し  
うの以の外は狼狽し太刀よ刀よ弓よ鉄炮よとう  
ろくく次第とて隊伍に並び加之あの  
程の疲は十の九のりて防くへと上と下へ  
混亂しけるを道理なり老僧達の本堂へうけ入不  
動明王と荒繩よ縛りうけ調伏の法を修し只  
今の間よと見をよと攻立くいの事とも  
その甲斐更に見えへあそ寄手の大勢透間なく追  
手の柵と打破りくや堀下よ詰りけたり強悪熾盛

の荒法師同宿ともと引率し一揆の勢とこ加え  
門下支え命と限りと防さけるを見て本堂よい  
よ強く責たて護摩の畑よ眼も明とを前後  
夢中よ修法とあひともあうりや調伏の非道の祈  
りよ明王の火焰よ紅いろと増あひくと見  
よのあふよ本尊の壇上震動し四方八方の境  
も知ど燃上り天井ようの炎の迦樓羅焰天を焦  
しと焼立よの衆徒一同よ仰天し出入とをれと  
も足痿て一步も進み得をあまりのてよあそれと  
て猛火の内へ飛入く真黒ようと焼死ける形勢  
へ生ありよ阿鼻焦熱の苦患と眼の前よ見も是

大問一 續後集

追手と固めしり大衆本堂の火災は驚き是を援  
とんとそれの寄手とてさすもゆり攻付たり敵を追  
拂てそのつら本堂の火を消んとそれの黒烟天  
とありて夥し覺鏡上人以來相承の口訣儀軌  
アそめよも傳授を重ん師資の秘藏を一つ一時  
の滅度となる我慢邪見の意よもさそりよあ  
とやあひひげん法滅の餘燄を胸をいつまめ合  
戦も心よ任せび寄手の勢よ乘て攻立ける不どよ  
難なく寺中へ切入あそけを得たりと切たを薙  
ふせおのりよ振舞ける程よ日頃の力量を自

慢しける惡徒共此期よ及んで心あらく勇も武  
もつ甲斐あそ雜兵下部よ切せたりと敵は逢て  
そそらくものあそりけと其外の若法師原へ  
爰よ討殺されしよよ突伏らと又火の中へ追  
入らして非業よ死するも多りうさ秀吉公へう経  
て謀らそあひしことしへ出口よ諸大将の勢と  
分て置とけるよあり一人よても漏るのあそふ  
つりげれ爰よ範如圓覺とつ二人の惡僧とめく  
所詮のうとぬ戰場のうさるとして如法深夜のとな  
どへ透と見合を切接て太田の城へ落行ア一の  
又叶とぬ其時へいさしめ討死をとんと二人ひと

大衆本堂の火災

大長刀と打り乾の方へと走り行此方ハ  
 伊賀の國主筒井う勢とて固めたり二人の荒法師  
 元より必死の覺悟あり打破りてとおのひ定めし  
 処あり筒井う勢の真中へ面もあつて切て入豎  
 様横様十文字うけゆりてい颯と引打開いける  
 ところと落あそや落ること見し折しも筒井う勢の  
 其中より鳴左近友之今年ハ四十六歳血氣をてよ  
 満々て心利たるものなるに圓覺よまう向ひ突つ  
 つり上段下段とて間と伺ひ戦ふなり圓覺も  
 根來第一の兵法者あり身の丈六尺七寸力ハ五十  
 人よと引動り石と一人よと取廻りとの荒法師

あり追つあそむる半時あまう押合けるる圓覺長  
 刀とりうりと打てくも是や組んと大手とひろけ  
 飛りくる左近の組とて浮つ沈らわしらひか  
 けり丁と切ていそこと切持て開りていそと打  
 元より名譽の劍法者推つあそむつ揉あふりとよ  
 圓覺有先あり切あすれをひ疼む処と得たり  
 とあそむ終に押えて首と取範如ハ圓覺う討と  
 と見え我身の上ともおのひ切筒井う勢と切り  
 四方よとりて八方よとて合て戦ひけるうあ  
 とも多勢よ取あめらと亂軍のうちよ討とけり鳴  
 呼根來法師この年來武命王命ともよ拒とける故

九月廿一日  
三月廿一日  
り月日も多し三月廿一日滅亡しつるを  
さしり秀吉公長閑り登山ありて諸堂の下火と  
しめこそその夜へ本堂の前陣と取るひ夜明け  
にへ生捕ののめと呼出し討取し首の名字と尋ら  
れける衆徒の首とて七百餘諸牢人の首三百  
五十餘生捕の僧百餘人と近郷近里の百姓千餘人  
なり是等費を処一日の佛餉とて十餘石あり  
へ一歳より三千六百餘石及ふその外雑用と合  
とて万餘石ありあこれ無用の國賊うかごと  
悉く山内と滅却追放ありしうへあこと聞はる  
諸寺諸山の僧法師肝をひやし今すて貯たりし

寄あひげり  
過  
器具兵仗と活却し薄氷と踏みし一日と  
因云國花万葉記大和國春日社二万二千石東  
大寺二千二百十餘石興福寺領二万千石廿石余  
法隆寺二千石余吉野藏王堂千十三石内山永久  
寺千石多武峯三千余石と云是と合とて五万三  
千石及ふ其外三百二百以下の寺領社領共れ  
いくとくそや攝津住吉二千百石天王寺千二百  
石紀伊國能野千石高野山二万千七百石出雲大  
社五千石伯耆大山三千石筑前大宰府二千石筑



後高良社千石豊前宇佐宮千石日本國よとていと

千石堀濱の城合戦の事

并一揆退散衆徒敗軍の事

千石堀とよひ濱の城に籠る所の一揆ともい昨日の朝積善寺に籠り衆徒并一揆とも寄手と合戦しける体とて寄手は目餘大勢なり然も時々刻々勢加え兵氣盛んし関の聲とあけ螺鐘とあけし刹那も絶衆徒一揆の限あり一人討れ一人を減加之寄手の手強く攻付るを見て氣おくれかためけるふよう積

善寺の衆徒の討出しを何事もおの大勢子かけ向みて軍をゆるや危ふし城を只今付入み攻入れかんか孫て互み力を合とて約束の共彼体の猛烈に軍兵み何みして手を合とへさ只此処を取れば功ととへさぬ去ぬら味方み取て一の腕を失ひゆる心地を此末如何とへさと評定しけるみ小賢けかる衆徒一人進み出て申ける不審と車のゆと秀吉自身出馬して岸の和田に在陣とて相違なり軍勢も六七万はたしうかりとていゆるも今の秀吉はとて九も有へ依て其体と伺とて秀吉岸和田みあ

るあゝ此三城へ寄る兵も今とこ多く軍  
の様もこそう急あゝん只寄る寄たるの  
とて龍のそ手痛く攻もとび積善寺の勢も  
たことも打漏したるあゝ日頃秀吉の軍ありと違  
ひたり定めて秀吉深と謀のあつるつるあゝん  
のいゝうゝ又も恐ひを出してあれと伺ふ秀吉  
岸の和田は在う如く見えなう只あゝん  
諸侍とも更本陣は出入するものなり  
然へ秀吉まこといそぎ雑賀那賀あゝんへ陣を  
の根來の本寺へ取かけし非とやゆてあゝ此  
処の軍かくの如くぬるきあゝんへ是れ我々を爰

ふ繫置へたための虚いゝと覺あるは如何  
と放言しあゝん山内天井濱高柵下の諸軍人  
うゝも充なる心付うゝと感心し充あゝん此  
処は居とこそある益ありとて根來へ引返し秀  
吉と防へたゝゝ秀吉も根來へ向ひたり  
へ我等へ秀吉の後陣よりいそぎ軍とてあゝん  
あゝん此事と濱の城へ知とさうんも口あゝん  
次第なるへ急告知とてあゝん恐ひはあゝん  
根來法師ひそぐ濱の城に至りうゝと談ひけ  
る濱の城ももろと不審とあゝんいそぎ  
へ一義も及む同心同日午刻に開城し根

來へ歸るへいと約定一訣し、その千石堀の衆徒一  
 揆一万余人、城戸を開て突て出當城の寄手へ近江  
 中納言秀次卿と大将と、中村式部少輔一氏、蜂  
 屋出羽守頼隆、長谷川新三郎渡瀬、小次郎佐藤、隱岐  
 守以下八千余人、けり積善寺の城を籠り、  
 衆徒一揆打出て根來へ引返し、のさどあゆみ、此  
 城の者として油断をへさるゝと、備と固く  
 一用意怠り、のさり、八千余人と長蛇をそか  
 へ一万余人と真中み取、あめ一人も餘さし、とりま  
 つり城中より打出し、兵ともい、南國の名と得し  
 ののち、れい双方をひもたゆ、るは浮つ沈つ切

合たり、まとも烈敷合戦おとし、親うゝれ、ても子  
 つり、兄手を負とも弟たをけむ、乗おえ、進  
 きたる濱の城、みハ、鈴木源左衛門、大橋高松を、  
 め、是も總軍一万余人、同時、切て出、此手へ向ふ  
 堀久太郎、秀政、高山右近、大夫、照坂甚内、安沼、藤堂  
 源助、高虎以下八千三百余人、を、城より切出、  
 ハ一人も漏さし、と火花を、ちらして、攻め、城  
 より切出、し、の共、い、ら、み、り、て、あ、打、破、り  
 根來へ、つり、入んと、ひし、め、く、を、寄、手、の、こ、れ、を、追  
 かへ、し、あ、ら、び、城、中、へ、入、へ、と、攻、め、り、城、中、の、兵  
 の、中、み、ち、さ、る、め、の、多、く、あ、ら、び、る、み、よ、り、寄、手、の、意

大開記一編卷七

十

をせぬくも悟りかくてあふ寄手をやぶるや  
然の様こそあれやと謀を定め一揆の張本十三  
人の一手くも組分どのとおめいゝ突立れ  
寄手やけやぶられ思はれ七八段引退せたる一揆  
の中も天井濱山内三郎大夫ら一手難く寄手  
を突ふせてゆつと圍を出たりしかの逃行んこと  
安かりしかとも残る味方を打立てんもせざる不  
敏もおもされ又引返し秀次卿の旗本へ切やく  
る秀次卿の旗本もてハ油断して休息せし処なり  
死の狂ひの一揆ともなかけ立られ備えられて  
まよらば右往左往又散亂し一揆のかくとおは

より雑賀那賀の組々を引ひけて圍をやぶる出か  
から濱のめのもい如何なせしやと見かけけ  
る山内天井濱火花をあらして切合たせハ鈴木  
大橋まゝ引かへして切やくは寄手多けせとも一  
揆のせらるるさげしけし終に打もらして退せ  
けりゆととも堀久太郎の軍功の入りぬのあは  
ハ跡よりまぶらう追かけ切かくは攻付たりけ  
る不ども高榊監物の腰坂なうゝハ西郷平内大夫  
ハ藤堂よさられかとも一揆その數八千餘人雜  
賀をさして引退く

重修真書太閤記十編卷之七終

重修真書太閤記十編卷之八

重修真書太閤記十編卷之八

秀吉公太田城水攻の事

并一揆等降参の事

千石堀濱の城ありける根來の衆徒并一揆と  
も二万餘人と聞えしもころり二千餘り討ふさ  
し闇夜に乘しころり道に走りて根來本寺の  
様子と聞はるとし秀吉公の爲に本堂諸堂社を  
て焼亡こと根來一山滅却を由りし衆徒  
一揆のつとむる力と落し此上の雜賀の太田次郎左  
衛門右衛門楯籠りし太田城に入て兎も角もあつとる

大岡記十編卷八

とて夜に更ぬと案内知たる道筋ありハ二千余  
人我先よと足とこやめけり抑あめ城に籠る一揆  
らめハ三万余人と聞えしりとも根來寺の滅亡  
と由と聞しり臆病未練のめのともしり  
落失て今ハ城將次郎左衛門尉一旗門葉のめめ  
又ハのうとぬ所從眷屬らりハ三千餘人ハあり  
またり此者ともハ流石雜賀と名と得し勇士と  
て日頃腕立しつるめめあり主從の好も  
それうとて落もを以残り止まるめとなれハ少も  
恐とて明日ハ定めて秀吉押寄とてハ花々敷  
防戦しと手並のめとと顯るつべし今夜うと

の命あり一盃の酒ハ無明の夢を醒し一期の思ひ  
出あり面々の藝を施こせよと歌ひつ舞つあり  
ける処へ千石堀濱の城の者とも二千餘人よて落  
來りたり太田對面しと今よて籠城し寄手と合戦  
の次第を聞うつは是よて落來りし志のめとと感  
し我等う勢もろりよても十よて防戦とへく思ひ  
し処よりハ加勢二千餘人合とて五千餘人あ  
つとれ勢やあめ者とも何とも一人當千の者とも  
あり秀吉の十餘万よけ合とて何ととととと取  
へとやといよて勇氣と増て寄手とやハ心の内ハ  
そ武うりけし夜とてハ明果とハ秀吉公御下知あ

後陣と御備と立ちて見物ありしに秀吉公も  
 陣に進んで短兵急攻むたし此城四方深沼  
 ろして一万三千餘人の勢を配りて進退自由あり  
 しむへさ地の理よわくび城に向ふは只一筋の細  
 道あり大和河内の武勇の者真先に進めし城中ふ  
 ての近々と引受弓鉄炮と以て是と防く寄手心の  
 猛げしと防く術の地理よりあへに進む得と其日  
 も空しく責口と引退て陣を固む翌五日の秀次  
 卿と始として黒田蜂須賀堀中村蜂屋高山長谷川  
 脇坂藤堂以下悉く参著しけしに寄手の誠と雲霞

の如く野よも山よも満々たりしつうの城と十里  
 廿里ふ取巻たし遁と出へし様もなり籠中の鳥  
 ぬめり似たりされとも太田へ聞えし勇士あり要  
 害と籠うつし少も氣と屈さる責とへ弓鉄炮と  
 以て此とあせと圍めともあれとめしつうとも  
 をび寄手の大勢あり一時責潰さんとおのへ共  
 長たぬ沼水よさん方るけしにあされしと只遠  
 遠と陣とより備を立てしあふ秀吉公の城の  
 容体巡見ありて諸将と下知しむひけるに此城り  
 いさげしとも要害より一揆といひとも太田の  
 さるものぞ急攻めし味方を多く損とへしたる

一當城平場あり水責よあることなり其用意をよ  
 と下知ありて城の四方よ場と高く築き吉野川の  
 末流紀の川とて大川のあると堰入たこと三日め  
 りの城中よ水入てけり然とも一揆等とこと一も恐  
 ると槽よ上り木の枝よ床を搔てあこと住  
 太田村よ云傳ある処周廻五十三町高六間敷十  
 八間馬踏五間一間よ晝夜六人うりり總人夫四  
 十六万九千三百人とりや此下行米千俵大豆百  
 表となり一人米八合五勺と賜らりこと云  
 城中のの心の猛しとつへとも水の次第よ深く  
 あり兵糧の壺も濕とつ日々用の用と闕鉄炮王薬も

水の為よぬとて今ハ為つと様もなり折しも不  
 思義や城の乾の鎮守の森の蔭より一尺あり白  
 蛇ありて水渦とて水よ入ると見るとはたちまち浪逆  
 たちて水渦とて雲起り雨ありをころよよおそ  
 ろし霹靂めと忽然數十丈の大蛇光りとをあら  
 て天上とて見ると坤の堤三十間をりり萌と  
 たら堰水溢て奇手の陣屋とひこ多くの軍兵水  
 よあつて死したるハ不思義ありける事ともを  
 こととも堤と築たて元の如くよなりり  
 水ハまじく深くなる城將太田次郎左衛門尉士卒  
 と集めて申様よとら當國舊住のののよと根來



第一の大壇那ある縁より根來の滅亡と見る  
 忍ひどる事と援らんため籠城をすううの根  
 來と共に存亡と同一くすう事本よりの義と云  
 へ但世の情態と觀する今秀吉ハ氏も素性  
 も知ぬめのと人ハいやめと其武威さうんなる  
 こ朝日の昇る如く時々高く刻々照らすこれハ  
 諸國に代々と重ねる英雄大名のしめはれぬ  
 歸伏して背くものなすまうとらんや我々如こ  
 小身ののこしと敵とくことと數日と過らう  
 秀吉も深く物とあつてこれハ面々の武勇の  
 ると日本國よりくことううとくそのく當城の

ちあつたり共後援あると頼もす終つ水  
 底に溺死して長夜の闇に迷ふ鬼とあつんと疑ふ  
 りる事と知つたの上も日夜をうさぬた  
 らんよ無罪の一揆御民とも死と共にせん不  
 敏なり早く此旨と以て秀吉に降と乞我々自殺し  
 て衆人と助へんと櫓に上り寄手と招き次郎  
 左衛門尉り心中と申げし秀吉公聞食くくの如  
 く水と以てせめ立つとい日あつとて城中をか  
 ろりしよあるとこと明白ありさういふり五千餘  
 人の内よへ止と心得を心あつて一揆と與をの  
 のもあるとそれ等と殺さんと國主の仁心も

大月己一編入

五

背けり因て格別の慈悲を以ての事と赦と間張本  
 人々も自殺とへその餘の男女さう一人た  
 りとも違論及及と仰出されけるは次郎  
 左衛門尉と一揆の本人三十餘人檢使を乞自  
 殺しけり即時堤を切落しぬひけり  
 流布本は太田次郎左衛門尉城中の手負死人ま  
 たい重病人の助うるはさめの百余人の首と  
 出と記と誤あり太田次郎左衛門とぬ根  
 來法師以下三十餘人秀吉公の知ぬひし名字の  
 ののとも自殺とぬはありあはしと岸和田に葬り  
 ぬひしと云今其墓存と云り浦菴本は百

五十三人切腹とわり  
 寄手のうち一揆の面とたりしは知るるのふ  
 此三十餘人のうなるのう不審と云  
 うの秀吉公さこ一ゆ元より一揆の事と云  
 る名譽の侍と目と同しつゝあつたはあはれ大將  
 とつゝあつたはあはれ大將とつゝあつたはあはれ大將  
 格別の品うらむびさうなるは歴々の真似と少  
 さげしと一城よりの御出馬を待て弓鉄炮を  
 らあち合戦しける殊勝さ大名家もあつたはあはれ大將  
 らびりて武士の作法通り城の本人自害とて總  
 軍と助命と申渡とぬは誰り首とぬはあはれ大將

ゐを本入あはしとのえいそれよてふと仰出され  
 うらと笑ひあひ太田次郎左衛門生うへうて百  
 人二百人及ふともあはしうらと仰らと  
 と聞の舌とあううて感いけ  
 陰徳太平記太田の城の東の方宮部善祥坊う  
 役所の塘くつと潰たりといへり又秀吉公宗  
 徒の者五十人切て出とへ然ハ残る奴原あれ  
 と取へといとありけるよあり水及新取とも五  
 十人切て何某此某と假名實名札と書て出り  
 へ塘を切落し一揆共いあ散々と落うとい  
 ひ此後根來へ便を遣う鉄炮三千挺出とへ

由仰らとて根來の若大衆たち聞ハ終滅亡  
 及ふといへり  
 秀吉公高野山と攻る事  
 并紀州平均の事

内大臣秀吉公年来紀州根來雜賀那賀のの共我  
 意よつものう王威とも崇め武命よも從とる  
 と惡いあひうともあはしと伐と暇あひとい  
 日一日と捨置とて今年天正十三年三月思  
 ひのよ根來寺と攻滅し雜賀那賀の一揆と打  
 平け数年の鬱懐一時よとされ満足のおより此  
 席と國中平均と治めとやと思召立とすの年婁部

へ押寄むへと由を披露ありけるは熊野本宮新  
 宮那智三山の別當以下とて秀吉公の本陣へ参  
 上し万端御下知従ふへと旨言上し及ひしは秀  
 吉公も御感おのめられを弥熊野三所權現の神  
 託の如く曲らざるを以て神慮とひし偽あふと本  
 願と定め和光の影あさらうは國土安穩の恵と垂  
 むへへと祈禱と勤とあふし然るは不入兵器を  
 貯へ無用し甲冑と造り武士の真似とるを以の外  
 は不當なり向後よ於てあふと慎むへし万一約束  
 し違ふは神速し軍勢とさし向社頭と破却し別當  
 神人と殺害とへし當國の奉行とて太田の城と

中村孫平次と差下を間謹て其下知し背くことあり  
 こと申渡されしを粉川の施恩寺と法度  
 と申渡さし泉州の槇尾山退治ありて高野山へ押  
 寄むひけり然るは高野山よては秀吉公の出馬わ  
 りしことと知し嵩山會合し七口と勢と分ち登  
 山の武士と防うんと企げると見て加藤福嶋以下  
 の諸物頭なら大に怒り僧法師の身とて弓箭兵  
 仗と取武士と對揚をんとと計ること以外の慮外  
 なる其義ありしは火筋と射て焼立吳  
 んとて其用意し及ひけると秀吉公聞召諸物  
 頭の怒り尤のことなれとも我らめし此山を破

却とへしといふのむべたる末代の僧徒等不似合  
の武藝とたりあも入用もあも公曹槍刀弓箭と貯  
へ鉄炮を藏し置と高祖大師の遺誠よとむと莫大  
の僧糧を聚と諸浪人を扶持しやもそれハ闘淨  
及ふ一事としく佛法興隆のためあも備と天  
魔の所為と似とるを戒しめ沙汰をんり為ありさ  
とハ我本意大師建立の靈場と馬蹄よりげんとを  
び面々もよく此意と得と執計ひ申へしと仰らと  
けるよあり何も感心しと退出しとるそのち加  
藤虎之助清正と御使としく高野山へ上をりれけ  
るよ清正紺木綿の羽織と白檀磨さの金胴を著し

銅造の太刀と帯し小童一人召具しと登山は  
たし清正り手の者ハ禿河根神谷の宿よ残り飯  
田覺兵衛森本儀大夫木村又藏井上大九郎齋藤立  
本鷗平次六人と雜兵四五十人の山門の傍よ扣え  
さよたりと清正高野山よ到着しはと一山の  
大衆會合しとるの兩門主としく檢校法師碩學の  
つと出仕しと内大臣秀吉公の御使を請し奉り  
ける處よ若き法師原ハ當山草創より以來守護不  
入としく王命も武命も用ひさる處なるよ秀吉何  
人あし自由よ我山と進退をととるやいと  
使者の首と切て秀吉の暴逆を制止とへしと我

等<sup>ら</sup>う私の意<sup>い</sup>は非<sup>あ</sup>ひ高<sup>こう</sup>祖<sup>そ</sup>大師<sup>だいし</sup>の御心<sup>おんこころ</sup>ひより同心<sup>どうしん</sup>しむ  
 へ大衆<sup>たいしゆ</sup>たりといひささし立<sup>たち</sup>ける處<sup>ところ</sup>は佐久間<sup>さくま</sup>入道<sup>にゅうだう</sup>末座<sup>まつざ</sup>  
 ろう進<sup>すす</sup>み出て申<sup>まを</sup>げるの若<sup>ごと</sup>大衆<sup>たいしゆ</sup>の僉<sup>せん</sup>儀<sup>ぎ</sup>をよの聞<sup>き</sup>え  
 ひへとも内府<sup>ないふ</sup>の本意<sup>ほんい</sup>僧<sup>そう</sup>の身<sup>み</sup>とて刀劍<sup>とうけん</sup>を弄<sup>りてあそ</sup>ひ弓<sup>ゆみ</sup>  
 箭<sup>や</sup>を執<sup>と</sup>て武士<sup>ぶし</sup>の真似<sup>まね</sup>とるといひしめ沙汰<sup>さた</sup>をんり  
 為<sup>ため</sup>とりや然<sup>しか</sup>り全<sup>ぜん</sup>く以<sup>もつ</sup>て大師<sup>だいし</sup>の本願<sup>ほんがん</sup>と同一<sup>どうい</sup>ことなり  
 其上<sup>そのうへ</sup>ふ使者<sup>しや</sup>と切<sup>き</sup>んと實<sup>まこと</sup>は大衆<sup>たいしゆ</sup>の恥辱<sup>ちじよく</sup>と申<sup>まを</sup>へくひ  
 とありしうこも聞<sup>き</sup>入<sup>い</sup>る大衆<sup>たいしゆ</sup>もひくつそとの加藤<sup>かとう</sup>  
 とやらんといひするものそと顔<sup>かほ</sup>見<sup>み</sup>て呉<sup>くれ</sup>んと立<sup>たち</sup>  
 上<sup>あが</sup>り幕<sup>まく</sup>の蔭<sup>かげ</sup>よりのとこ見<sup>み</sup>んと進<sup>すす</sup>む處<sup>ところ</sup>は何事<sup>なんじ</sup>と騷<sup>さわ</sup>  
 騷<sup>さわ</sup>といひつゝ此方<sup>このあた</sup>と見<sup>み</sup>廻<sup>まわ</sup>るとののとこ見<sup>み</sup>てハ

その長<sup>なが</sup>七尺<sup>しちせき</sup>とかりみして色<sup>いろ</sup>白<sup>しろ</sup>く眉<sup>まゆ</sup>目<sup>め</sup>うははけりそ  
 大男<sup>おほおとこ</sup>ありあまの誰<sup>たれ</sup>そと問<sup>と</sup>訊<sup>き</sup>ぬるまあまもあそ加藤<sup>かとう</sup>  
 虎<sup>こ</sup>之<sup>の</sup>助<sup>すけ</sup>よといひれく今<sup>いま</sup>まで腕<sup>うで</sup>立<sup>た</sup>しはり若僧<sup>わやくそう</sup>とも  
 色<sup>いろ</sup>青<sup>あせ</sup>ざめて身<sup>み</sup>をふるちやあまの實<sup>まこと</sup>は人<sup>ひと</sup>あるみや  
 いまもあらびやとや天狗<sup>てんこう</sup>の化<sup>まが</sup>てころものか何<sup>なん</sup>も  
 も人間<sup>にんげん</sup>といひおもれをおそろしや首<sup>くび</sup>切<sup>き</sup>んといひ  
 ことを聞<sup>き</sup>れのらん我<sup>われ</sup>みのあらしといひひひ尻<sup>しり</sup>ご  
 として逃<sup>のが</sup>れたらみやまおかくぢ見<sup>み</sup>えまけりその  
 のち成就<sup>じゆうじゆ</sup>院<sup>いん</sup>法<sup>ほふ</sup>印<sup>いん</sup>申<sup>まを</sup>されけるぢぢもく我<sup>われ</sup>山<sup>やま</sup>大師<sup>だいし</sup>  
 遺跡<sup>いせき</sup>とて勅<sup>ちやく</sup>願<sup>がん</sup>の祈<sup>いの</sup>禱<sup>たう</sup>を修<sup>しゆ</sup>行<sup>ぎやう</sup>するふより上の  
 天子<sup>てんし</sup>より下<sup>しも</sup>の攝<sup>ちやく</sup>政<sup>せい</sup>關<sup>かん</sup>白<sup>はく</sup>將<sup>しやう</sup>軍<sup>ぐん</sup>納<sup>なつ</sup>言<sup>げん</sup>等<sup>とう</sup>の寄<sup>よ</sup>進<sup>しん</sup>し奉<sup>ほう</sup>る

所領の地紀列大和和泉は於て廿八万余石は及ぶ  
 と大師の法験といひのくまてこの奇代の朝思  
 といふへへ根來山の覺鑊上人の跡みして真言新  
 義の靈場あり十二万石余の地を領しその富  
 みまかせて武命を勿緒しゆら故は今滅亡した  
 り當山ふても廿八万石の勢をたのまて秀吉公の  
 命をたむむくて根來と相似たり當山は廿八万石の  
 勢あまの秀吉公ふは三百万石の勢ありいうて廿  
 八万石の力を以て三百万石の軍は立ちかへさ  
 よく思慮をめぐら根來の先蹤はあらひむ  
 みとあつたといひける処は極樂院の梅道といふ

のいひはよも秀吉の使は對面あるへくは使者  
 の口状は付てまゝ異見もあるへくと申はより何  
 さぬまはへへとて清正を客殿は招き入けは  
 木食興山上人出むへ秀吉公の仰のおりむき何  
 事なやといへへ清正はは秀吉公勅命はより  
 て紀列進發ある上の勅願所たる高野山第一は參  
 上し勅誼はまゝ紀列平均の祈禱を修してこ  
 ぎ勅願所たる法務あるへけはまゝ根來山熊  
 野三山杉川寺等も勅誼はまゝやひゆる野山  
 より今以て何とも申越るてもねくかへて七  
 口は逆茂木をひき編は合戦の用意をよるれは

条違勅の咎のいかゆる知れくひ率土の濱を王臣  
形う僧俗をいふ以普天の下王土形う山林田野を  
こつた以けり形う高野山に於てハ勅定は後を  
ざる定めあらば何ぞ勅願の靈場といふや大師の  
權化高德かを嵯峨天皇の獻慮哉尊奉かゝる人衆  
徒の法驗いちどくともきては大師末流の弟子  
あら以や如何今上皇帝の綸旨よそむく道理や  
ある是等の処たしや勅答申さばへといと嚴  
重に申渡しくハ木食上人はくしんく勅定は後  
ふへそよし哉御請申けるみより清正かき祓て然  
らハ某と共に下山あるへしと申渡しけしハ木食

上人一儀も及を以清正よ志さかひ秀吉公の本  
陣よりこつ秀吉公を拜し勅命哉おめんし大師の  
遺告は從ふへそ旨を言上しけしハ秀吉公も尤  
のこ形うとて高野山へ軍勢をさし向ふふあといハ  
御ゆるしありの事とも廿八万石を没収しこつ  
み四万石を寄附しむひしハ高野山もやへ置  
ゆる諸浪人もあらへかきしんくし仕官した  
るけりとかやかくて赤松半兵衛神子田弥左衛門  
哉奉行とて紀列加田浦に於て數百艘の兵船を  
めくらせむひ又吉野十八郷のめのみ千本の槍を  
むらり熊野の押とかりしむふ



重修真書太閤記十編卷之八終

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '大明の' and '公の本'.

重修真書太閤記十編卷之九

長曾我部家系の事

并軍議評定の事

土佐國の長曾我部元親と云人あり其先祖と尋ぬ  
る唐土秦の始皇帝の孫陣譽といふの皇朝へ  
歸化してそのめい信濃國に住けり此人文武の達  
人なりけりそのついで天聰に達し上洛してその由  
宣旨のありけりそのついで遙々と九重の都に登りし  
る早速衛府ありし仕られ奉公の勞と重臣叡慮  
よりありつるそのついで秦の氏と賜らるゝとあり是

へ人皇十四代仲哀天皇の御宇のころやとれま  
り子孫繁榮し人皇三十二代用明天皇の御時守屋  
大臣とのみ人佛法を信をひ寺と毀ち佛像と傷く  
秦氏十五代の苗裔より川勝といふのあり聖徳皇  
太子と共に守屋と誅戮し佛法を興隆しその功を  
賞をうと土佐國長岡の郡を賜り曾我部の卿よ  
住しはるる長曾我部の秦氏と唱へたり又その  
子孫香美郡よ住ののち香曾我部と稱をせり  
多くの代を累は秦の能俊り時よ至り技手大門西  
郷三千貫文と知行し京都の大番懈怠なく勤たり  
しうある時別勅と以て天盃と賜りけるその御

盃の中よ酸漿の葉浮ひけるを以て定紋とな  
せしとたり能俊りより三代を経て秦信俊とい  
ふののあり足利尊氏將軍よ從て勲功ありしう  
長岡一郡の主となりつるなり信俊の孫と秦元秀  
といふ即元親の祖父なり此頃土佐國より一條權  
中納言兼定卿として高貴の御方ありしう抑土佐  
の一條家と申へ關白右大臣兼良公よりめて御下  
向ありしうありしう關白左大臣教房公權大納  
言房家卿中納言房冬卿權中納言房基卿より五代  
相續て國務と執行ありけるしう房基卿逝去の後御  
家督よりしうありけるしう一條關白房通公の

三男と養子として下向す。即今の兼定卿なり。又元秀戦死しける時嫡子千王丸いよいよ六歳ふりけるを一条殿あはれし御覽し御手元より養育をせむ。十五歳よりける時元服を宮内少輔國親と名乗せむ。國親の嫡子元親なり。元親兼定卿の嫡男内政朝臣と塔とたり。のち天正元年九月十六日兼定卿隱居ありて豊後國へ移りて土佐の國の處置へて元親の心の儘と行ひけり。内政朝臣へ長岡郡大津城入り御ありけり。一条家累代住とむ。一藩多郡藩多城へ元親の弟吉良左京進親貞と入置し。うへ藩多郡も自然と

元親の手よ入た。今へ土佐七郡とくく元親の領とありしけり。家臣より吉田備中守同次郎右衛門久武肥後守同内藏助中山大和守同忠兵衛重名藏人同丹後守江嶋備後守吉田伊賀守國吉右門尉姫倉豊後守南岡右衛門大夫福嶋飛彈守馬場因幡守以上十五人の家老なり。その外若手の侍より江村孫左衛門同掃部助赤名彌次兵衛同將監野村勘右衛門南岡四郎野中三郎右衛門金子傳兵衛國吉三郎山川五郎右衛門横山九郎兵衛姫倉太郎右衛門吉田彌古衛門横山三郎右衛門中山源兵衛同忠八十市新古衛門以上十七人都合三十二人と長曾

我部三十二人衆と云數度高名手柄と顯くたる  
 ののちのちとて元親ののちとて用ひ諸方と勢  
 と出ひ時ハつらも大將系とつらつら又元親  
 の嫡子彌三郎信親武勇勝とたること父祖と超次男  
 ハ香川五郎次郎讚岐國の香川信景の養子とつれ  
 う三男津野孫次郎四男ハ右衛門太郎盛親五男右  
 近大夫と云元親の弟二人あり吉良左京進親貞長  
 曾我部右近大夫泰親と云親貞ハ同國蓮沼の城主  
 福田一条殿と戦ひその家臣中村越後守と降し伊  
 豫國坂山地本川とて切從ハ安喜の城主山城守と  
 戦ひ新城穴内安喜の三城を同時ニ攻落し城主山

城守家臣黒岩越前守と腹切を豫州名張の赤名  
 丹後守と置て是と守らとをれり一条殿旗下久  
 松の城主佐武信濃守と降らと其勢ニ乘仁井田表  
 の敵とも賀文志和西原伊豫是等と合戦しつと  
 も降參こそ下田の城を燒討し責落し土佐七郡を  
 切從へ一の宮高賀茂大明神の社頭と再興し神事  
 祭禮舊規ニたりと執行をたり抑高賀茂の神  
 と申ハ土佐郡家の西四里ニありと此國の風土  
 記ニ見えたり一言主の神とも味耜高彥根の神と  
 も申をたり一言主の神といふハ大和國葛城の山  
 小鎮坐すしと大己貴の御神の御子高彥根命の

御事ごんごなりし味あじ相さう高たか彦ひこ根ね命のみことと申まをへ下しも照てら姫ひめの兄あには  
 とハ大おほ己み貴か命のみことの御ご子こなりしと論ろんなり然しかしハ高たか彦ひこ根ね  
 と申まをも味あじ相さう高たか彦ひこ根ねと申まをも同おな神かみと知しへしとの後のち  
 羽は深ふか吉よしか良ら川がわ室むろ濱はま野の田の浦うら等らと戦たたかひ敵たか敗は北きたけしハ  
 追お討うちをしと数かず度ど々々と室むろ戸の津つ田の東あづま寺てら灘なみ目め三さん半はん志し  
 井い来き名な等らと合あ戦せん一いつ条じょう殿のと謀まをして隠ひん居くさを志しの  
 ちハ誰たれ一いつ人ひと手てさらぬめのもものなりしとしのり讚さん岐ぎと攻せ從じゆ  
 へつゝいて阿あ波はと調てう畧りやく一いつ三さん好こうと害がいあめ今いまハ四し國こく  
 一いつ圓えんノ我われ旗かた下したとなりしハ三さん十じゅう二に人にんの猛もう將しやうと擇えら  
 こ出いして伊い豫よ阿あ波は讚さん岐ぎ三さんヶヶ國こくへ不ふ遣しんしてあれを治ち  
 めめ其その身みハ土つち佐さの大おほ濱はまノ城しろ郷がうとりしてあれを治ち  
 義ぎ

植うゑ將しやう軍ぐんの公こう達たつと大おほ將しやう軍ぐんと仰おほ奉ほうり是こゝを都みやこノ入い奉ほう  
 ると軍ぐんの名なとなりし東北とうほくの海うみとなりし上かみ國こくへ討う  
 出いんと兵へい船せんあらして用もち意い風かぜと待まちて居ゐたりける  
 義ぎ植うゑ將しやう軍ぐんの長なが男おとこ龜かめ王わう丸まると申まをハ實まことハ義ぎ澄じやう將しやう軍ぐんの  
 御ご子こあり永えい正しやう五ご年ねん六ろく月げつ義ぎ植うゑ將しやう軍ぐん西せい國こくより上かみ洛らくあり  
 て再また度たび將しやう軍ぐんノ任にんしてあらして義ぎ澄じやう將しやう軍ぐんハ解と官くわんをし  
 且かつ江え州しゅう九く里りへ落おちて然しかるに六む年ねん龜かめ王わう丸まる誕生たうじんあ  
 りしハ義ぎ植うゑ將しやう軍ぐん養やうひ取とりて御ご子ことなりしハ母はは  
 ハ細こ川がわ成なり元げん女にょと云い細こ川がわ系けい圖ず成なり元げんといふ人ひと之の  
 えハ龜かめ王わう丸まる元げん服ふくあらして義ぎ冬ふゆといふ天てん文ぶん三さん年ねん廿に  
 六む歳さいの時とき阿あ州しゅうへ下しも向むかあり從したが者もの三さん百ひゃく六む十じゅう人にんとり

大隅言一多卷  
五  
や其頃阿州の細川讚岐守持隆四國管領として  
勝瑞といふ城に居あつて將軍の公達とい  
ふと以て那賀郡平島庄古津といふ處に館作り  
て居奉り平島十一村并山各四村とて三千貫  
の地と獻をしなり天文廿一年持隆三好ら為り  
弑せしむるに義冬周防國に下向せしむる四十  
四歳の時なり此の方へ大内義隆卿の妹の息の  
彼國に親しく申通せしむる人ありしむる然る  
に北方永祿年中周防に逝去のちありしむる  
阿州へ歸りて平嶋に住むるに天正元年十月六  
十五歳にて卒むる其子三人義親義助義任とい

ふ義親の永祿九年阿州撫養りて卒し義助の天  
正十三年四十五歳義任の四十三歳義助の嫡子  
義種は十二歳なり元親の奉をい何人とも本  
書に義景將軍の君達辰九君と左衛門佐義國と  
号し其嫡子鶴九十一歳なりと大將軍と仰くと  
云り義景といふ將軍なり  
然るに根來滅ひて後熊野高野の如きと秀吉の  
武威よりひき従ひ紀州一國全く平均しけし元  
親もなまのひに度海に却て其鋒を挫るの如何と  
見合居ける處に讚岐國への秀吉の先手仙石權兵  
衛尉秀久ありしころ年貢と出さぬめの十三人と

捕て宇多津聖通寺山の麓よりとて京殺し香東  
郡安原に籠り安原甚太郎以下十二人と聖通寺  
の山下に磔し百餘人と獄門よりけ阿波國へハ  
蜂須賀家政打入て國中と切棄けくるると元親  
の拘え置撫養嶋木津一宮の城々より急と告げ  
るると元親諸將と集め申けるハ秀吉といふハ  
氏も素性も造りからぬものと聞け然とも軍の道  
より謀り運は叶ひつると以て既に中國  
北國と切從へ今南海道のらめなる紀伊國と平  
均に治め終に四國に渡り我旗下の國々と切鎮め  
んとする誠の時節到來と云へ併元親若年より

四國の棟梁として百万の衆あり居りし  
て是と待んと謀りしと拙し先づ時ハ人と制  
し後々時ハ人と制をらるりて海上に打出てお  
とを謀りしとつれける子息盛親聞もわと  
ば父君の仰よひへとも海上に出待へるとハ  
千慮の一失と覺えぬ某う思案するハ伊豫阿波讃岐  
の堺に要害と見立をてへ勢と分ち朝け夜打  
しと掛あやまりくゆるんハ十万廿万の勢も恐  
るると是はゆと申けし何も此議に同然ハ手  
分とあをよとて三州の堺目くハ人数と配りて待  
りし

石田吉三成長曾我部元親へ使節の事

并秀吉公四國攻決定の事

内府秀吉公紀州一圓ふ平治ありて... 根來高野熊野等の... 上洛ありて直に参内... 事悉く奏聞ありける... 室と尊崇しむらん為... 厚く... 諸將と勞しをれ... とも織田殿より... かと歡ひける...

權... 朝日の昇る如く... 海東山北陸山陽山陰南海の大小名... 小四國の長曾我部... 由をば王臣として王室と尊... 貢と入るる... 土州の海嶋の一隅... 海のとて... たるり如く... 者より申含め土佐へ... ひその答より... 御處置ある...



龍吉三成と土佐へ下されけり龍吉支度調ひ出立  
けることと内大臣殿龍吉とめさしといふ三成承を  
し秀吉の木下藤吉郎といひ昔より今内大臣の  
高官に進こしうとも一日片時京都と跡よと  
し是は天照大神の御裔よと高皇産靈の御筋  
あといりうりそめよもあろそりよ思ひ奉るつこみ  
あつと骨み刻してこととほのり然るよ元親  
あとの元下のののあれとも天照大神の御慈よ  
あり今日と暁昨日と暮さしよあろそりよその御恩  
とあつと上洛もをば使者も貢も奉らば四國と  
私めのよはつと心のまごよ振舞とあそ心得存ん

や阿波伊豫の二州と返上し早々上洛して王威  
よりこと申し龍吉あつと土佐讃岐の申賜  
りて得さへつと申をり又兎角申あつと神速  
し軍勢とさし渡り元親り一類とつと征伐あつと  
さし能々思慮して御請申と仰らしけれは三  
成りこまり御前と立ち福嶋市松申けり  
四國への御使と石田一人よ仰付らしつと心許あ  
し正則相ともみ下向仕るつと望らし時三成  
正則よ向ひ何といふつと是式の御使勤得ぬ  
あつとの龍吉あつと申あつと正則つと龍吉あつと  
び是は大事の御使あり正使副使と二人と遣つと

六月己一編末

七

然るへくゆと申けるを三成とて争ひけるを  
 加藤清正片桐且元雙方とあこめけるを御覽とて  
 秀吉公正則左様と申と無き四國の使者へ左吉一  
 人にて事足り子細の後と知へさひり仰らまはせ  
 るより正則も御次へたつ三成の氣色をみて天  
 正十三年四月中旬大坂と出船讃岐國へ渡り土  
 佐國へとあひむさける讃岐の細川源左衛門尉  
 高松の城よりありて軍兵と調練して居たる所へ京  
 都より土佐へ使節の下向と聞道路の掃除丁寧と  
 申付たことも賣物の日頃四倍と申付たり叔三成  
 土州大濱に至り著る長曾我部の侍は横山四郎兵

衛とのゆめの立出三成一人城の大手の潜り門は  
 入書院に通じける上段は十二三の少年烏帽  
 子直垂とて二帖臺に坐し其傍は元親ありて三成  
 う口状と聞元親申様是の前將軍の御孫鶴丸君は  
 まりまはなり日本の大將軍と申は此君あり秀吉  
 誰の許と得て武將とあるの覺束はとひひけ  
 どの三成うち笑ひ實は御邊の四國の田舎人とい  
 るまはしける前將軍とい永正のむく京と出奔  
 ありて征夷大將軍と解官をく阿州撫養すて死  
 去ありし惠林院殿の御事なりそれより大將軍の  
 職五代を経て足利の家へ断絶したることとも知る

本解官のちあはれの大將軍といふ事、由ありの  
少人あり我邦よての天子初と貴さのひやく官位よ  
重さのあり秀吉今の正二位内大臣あり惠林院  
殿の從二位あはれの秀吉より一等下ふすこと以か  
る夫と知むとぬ元親あはれの左様といふ事、も理  
なることも早く上洛して世の廣さこと知むへやと  
云れ、元親黙然としてめのひやくびやありて元  
親坐と立三成と上座よあり居つるも元親南海  
のくとも生と世のなりゆきと存をばひ然あり

遠祖よりこの國を領しての更ふ鎌倉殿よりも京  
都將軍よりも賜むるは然るも一へ弓矢を以て切  
取ての阿波伊豫と返し、そのころ存知もあはれ  
以此由たしく申ふへと云て又ひふことなり、三成  
も言へば様あはれとての城と出て讚州路へつてけ  
る、又買物高直あるも用途とほりひ盡し、據ふこと  
は浮田よ錢とりてゆりて京著し直も御前も伺  
候し、くしくと言上し、けし、秀吉公聞食され、ひ  
そ其方一人を遣りたるなれ、れ、余人あり、の必  
定喧嘩、のつうけり、めのとを仰ら、と夫あり  
參内ありて四國征伐のこと奏聞ありける、又速ふ

勅許ありけし四月廿六日大坂城より出船し  
ふその人々加藤清正小早川隆景との軍監とし  
四万余人黒田父子浮田一黨の二万五千を伊豫  
國へ向ふとあり大和の大納言近江中納言の六  
万余人を讃岐國へあしりし

重修真書大問記十編卷之九

...

